

文化功労者への弔辞

(美術館長より)

ここに私どもが畏敬する、近代美術史に、輝かしい金字塔を打ち立てられた卓越せらる日本画家○○画伯の葬儀を執り行うにあたり、謹んで哀悼の意を表するものであります。画伯は八十年代を越えるご高齢にもかかわらず、なおもお元気で日々絵筆を握つておられたとか。昨年暮、○○テレビの美術番組に、私もご一緒させていただいた時のお元気なお姿が、いまだ記憶に新しいだけに、率然としてみまかられたと承つても、にわかには信じがたい思いであります。

かつて夫人が「○○○は絵のこととなると、食べることも、寝ることも忘れてしまいます。私がやかましく申しますと機嫌が悪くなるのですが、健康を害しては困りますので」と言つておられたことがあります。ある時、滝を写生するといつて山中へ入られ、なかなか帰つて来られないでの、もう少しのところで、捜索隊をだすところだつたという話も伺つた事もあります。

天与の才能に加えて、そうした画業一筋の純粹無垢なお人柄ゆえ、おのずから絵絹の上に現れて、人を感動させずにはおかない、清澄な画風が生まれたものと思います。

画伯は明治〇年のお生まれで、年少の頃より○○○の絵を学ばれたとのことであります。が、明治〇年には東京美術学校を優秀な成績で卒業され、その年のうちに第〇〇回「文展」に初入選を果たされ、日本画壇の輝ける星としての第一歩をしるされたのであります。

それ以来、水墨を主体とした風景画に、新境地を展かれ、常に一点に止どまらぬご清進を重ねられまして、歴史を主題としたもの、仏教を主題としたもの等、広い分野にわたりつて、見事な成果を上げられました。

大正〇年に、日本美術院展に「○○○○○」を出品以来、同展覧会ばかりでなく、さまざまに発表の場を得て、意欲的な制作を続けられました。

昭和〇年第〇〇回文化賞、昭和〇年には大作「○○○○○」を皇室へ献上せられ、昭和〇年には、紺綬褒賞受賞、文化勲章受賞、文化功労者に列せられるという、榮誉を担われました。

画伯の日本画壇に於けるご功績は、どうていここで列挙し得るものではありません。かかる類い稀な芸術家を産み出したことは、郷土の誇りであり、画伯の偉大な業績は、末永く称えられることであります。

近い将来、当市に「○○○○美術館」の設立を是非実現させたいと、最大限の努力を以て、その目的を達成させる決意であります。

ご子息方にしてみますれば、いかに世間でいうところの長寿をまつとうされようと、ご孝養の限りを尽くされようと、現在の父君を亡くされてみれば「風樹の嘆」をかこたれるのも無理からぬことではあります。が、せめて、最後まで絵筆をとられたことを、お幸せな生涯であつたと、お心平らかにご菩提を弔われんことをお祈りしております。

おわりに画伯ご自身の筆によつて描きだされたような、迦陵頻伽の遊ぶ仙界に、その芳魂の鎮まらんことを願つて、私の惜別の詞といたします。

平成〇年〇月〇日

○○○○ 美術館

館長 ○○ ○○

